

- 2) 天野努他『八千代市村上遺跡群』(昭49)
- 3) 本郷台遺跡調査団『本郷台』(昭54)
- 5・6・7・8・12・13 千葉県教育委員会・千葉県文化財センター『公津原』II(昭56)
- 9・11 日本道路公団・山田遺跡調査会『山田水呑遺跡』(昭47)
- 10) 種田斉吾他『東南部ニュータウン』3(昭50)
- 5) 高岡寺院跡発掘調査会『高岡寺院跡発掘調査報告書』(昭53)
- 6) 群馬県教育委員会『十三宝塚遺跡発掘調査概報』II(昭51)
- 7) 斎藤忠他『日光男体山』(昭38)
- 8) 雑令, 造僧尼籍条
- 9) 戸婚律, 私度入道条逸文, 僧尼令, 私度条
- 10) 僧尼令, 非寺院条
- 11) 僧尼令, 禪行条
- 12) 続日本紀, 養老2年10月10日条
- 13) 続日本紀, 文武3年5月24日条
- 14) 三教指帰, 序
- 15) 続日本紀, 文武4年3月10日条
- 16) 類聚三代格, 応修理鹿鳴神宮寺事
- 17) 『平安遺文』(第1巻), 多度神宮寺伽藍縁起資材帳
- 18) 竹田聰洲「七世父母攷」『佛教史學』第3号(昭25)所収
- 19) 続日本紀, 天平19年9月2日条
- 20) 続日本紀, 延暦10年9月16日条
- 21) 拙稿「群集墳社会の政治=宗教過程」『埼玉考古』第17号(昭53)所収
- 22) 日本靈異記, 上巻第7縁
- 23) 日本靈異記, 上巻第22縁
- 24) 続日本紀, 宝龜4年11月20日条

大栄町^{うすぐりこうさんれい}臼作皇産靈神社の和鏡

岡田光広

香取郡大栄町は、北に佐原市、西に成田市と接する位置にある。大栄町にはその郷土史を語る上で、興味の尽きない寺社が多く存在する。ここで紹介する青銅製の和鏡は、昭和57年9月臼作地区に所在する皇産靈神社で、改築のために本殿をほぐした際、その基礎部整地作業中に土中より発見

されたものである。

和鏡は、縁に錆化による若干の裂傷が認められるだけで、比較的良好な状態を保っていた。色調は鏡面が全体に青緑色、鏡背は凸部で茶褐色、他は全体に青緑色を呈す。

まず、各部の様式、並びに計測値等を述べる。

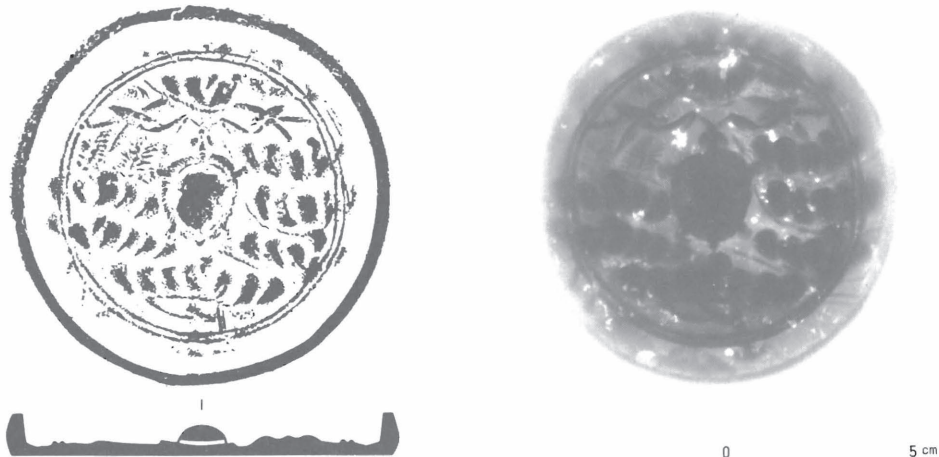


図1 鏡背拓影図(1/2)及びエックス線透過写真(千葉県文化財センター撮影)

縁は直角式中縁で高さは11mmを測る。径は103mm、鏡面は平面である。界圏は断面が管状式の二重圏（複圏）が用いられる。把手となる鈕は亀形で縦31mm、横20mm、高さ3.5mmを測る。文様は松を地文とし、鈕座の左側に竹を配している。また、鈕座の上方で左右に鶴が飛び交い、亀と鶴は互いに接し、いわゆる三者接吻の様式が採られている。これらにより文様の構成は、きわめて縁喜的と推察できる。同時にこの和鏡を通例に従い「松竹双鶴鏡」と呼称できる。

文様の描かれる鏡背は、ザラザラとした感触で粗雑な仕上げとなっている。これは、鑄成後に通常行なう背面文様間地膚のキサゲを除いたものと思われる。あるいは、土型に既製の実鏡を置いて踏みつけ型をとる「踏み返し」鑄成によるものかもしれない。いずれにしても、本鏡が決して上級の鏡ではないことを示している。また、金質は青銅製和鏡の場合、下級の雑鏡的なものや、奉納品ほど銅、錫以外に鉛等を混ぜる傾向にあるが、試撮したエックス線写真からも数ヶ所に金質の溶融不全と思われるエックス線抜けが認められる。

さて、本鏡が製作された年代であるが、年代を決定する決め手となり得る各部の特徴を再び検討してみたい。亀形鈕は、本鏡にも見られる松鶴文等のような文様意匠と関連して多用されており、特に室町中期以降に縁喜的な解釈から盛んに存在するものである（註1）。

次に、主鑄文となる亀鶴三者接吻の様式には、双鶴が対飛双鶴と対向竹鶴によるものがあり、それぞれ変遷を辿るものとされる（註2）。両者に共通して言えるのは、自由な遊飛、あるいは悠々とした動きのあるものであったのが、室町時代あたりから鈕が亀形になるに際し、俗説的な縁喜思想に影響された固定図文に変遷していったということである。

以上のように文様等の特徴からみる限り、本鏡

の帰属する年代は、最も古く考えても室町時代に求められるが、本鏡のように仕上げの手間を省略した手法は、室町末期以降に多用するとされるから、本鏡の製作された年代も概むねその頃であろう。

最後に本鏡の発見された皇産霊神社との関連で、本鏡の持つ意味について若干の私見を述べ、しめくくりとしたい。既に述べたように本鏡は、神社本殿の基礎部土中より発見されたのであったが、この発見状態は埋没よりも埋納の結果であると考えたい。寺院の堂塔建立に際しては、地鎮のための鎮壇具として金、銀、真珠、水晶、琥珀、瑪瑙、瑠璃等の七宝の他に鏡、剣、玉等が埋納されることが知られているが、本鏡もそれから派生して地鎮鏡として地中に埋められたのであろう。すなわち本鏡は奉納を目的とした儀鏡であると言えるが、儀鏡であればこそ、鑄成に際して実用的な役割を多少省略し、一見して粗雑に見える仕上がりもあって然るべきことである。

文末になってしまったが、本鏡発見の場に居合わせ、即座に本鏡を託された秋山光道氏に謝意を表します。なお、本鏡は改築された皇産霊神社の本殿に再び御神体として戻されるそうである。

（6班・東関道事務所）

註

- 1) 広瀬都巽『和鏡の研究』角川書店、昭和49年による。ここで言う縁喜の解釈は、亀は千年、鶴は万年生きるといういわゆる縁起の良い生物であるからととれる。
- 2) 前掲著書による。

参考文献（註）で掲げたものを除く

- 高橋健自『鏡と剣と玉』富山房、明治44年
東京国立博物館『日本の金工』（鑑賞のしおり3）
昭和55年
大栄町教育委員会『郷土史話』昭和50年